

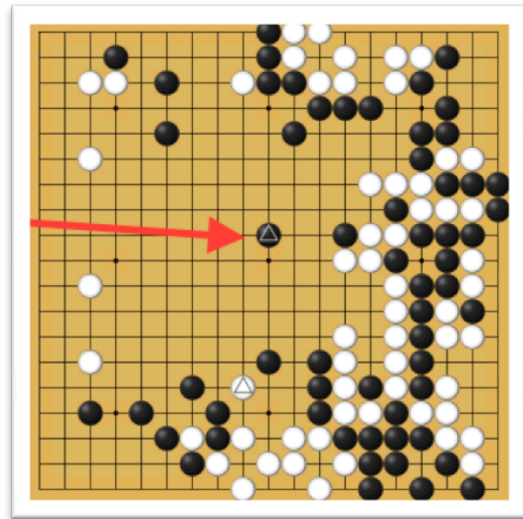
## 囲碁にまつわる言葉 【耳赤の妙手】

1837年、10歳で桑原虎次は十二世本因坊丈和の門に入ります。虎次の抜き出した碁の才能に師の丈和は「150年以来の棋豪である」といって、非常に喜んだそうです。現在でいえば仲邑 薫さんのような話題です。虎次は後に本因坊秀策となり、道策とともに「碁聖」とたたえられています。

### --- 【耳赤の妙手】 ---

1846年、井上幻庵因碩と秀策の対局で形勢の良かった碁を秀策の打った妙手で形勢が一変し、動揺した因碩の耳が赤くなりました。この碁は結局秀策の3目勝ちとなります。これが有名な「耳赤の妙手」といわれています。

秀策は目いっぱい我慢の碁の最中、右図の赤矢印の一手に着手するのに長い時間を要したようです。これが「耳赤の妙手」。次の一手は因碩が長考。次の間に控えていた主治医が因碩の体調を気遣い表情をのぞいて見ると顔面から「耳」まで赤みをさしていたといわれます。主治医は「秀策の勝ち」と判断したともいわれます



1848年、秀策は本因坊秀和の跡目となり、1861年に御城碁が中止されるまでの13年間、19局全勝の大記録をつくりました。秀策が編み出した布石法は後に「秀策流」といわれ、明治後半から大正時代にかけてコミなし碁の先手必勝法として大いに研究され、現在も廃れることなく打ち継がれています。

(2023年6月10日 大和田囲碁同好会 成田 滋)